

## 中国思想とエコ・フィロソフィ

## — 中国的环境論の一側面 —

山田利明

中国の自然論あるいは環境論として、最も大きな影響をもち、現在も圧倒的に支持されている思想がある。風水説といわれるこの思想は、大は都市の建設から、小はアパートの自室の家具の配置に至るまで、陰陽五行説や気思想によって説明されて、多くの人々の願望を支えてきた。それはただ中国大陸のみにとどまらず、朝鮮半島や台湾・日本、あるいは東南アジアなど、いわゆる漢字文化圏の国々にまで伝わった、と過去形で書くと何やらかつての中国文化の残影と思う人も少なくあるまい。しかし、風水説はいまだに中国を中心に行われる現在進行形の信仰である。

そこで、今回は最初に風水説というのは一体何なのか、ということ論じ、次に環境論あるいはエコ・フィロソフィという考え方の中で、風水説をどのように組み込むことができるのか、という問題について考える。

風水というのは、文字通り風と水という意味であり、風とは気の流れ、水とは水流すなわち河川沼沢を指す。大地の気の流れと水脈の存在から良地を選ぶ方法である。気と水による土地の選定はすでに漢代末（B.C. 五）頃までには確立していた。それは、B.C. 五世紀以前の『詩経』（大雅・生民・公劉）に、「その陰陽を相し、その流泉を観る」とあるように、陰陽の気の調和と流水の状況を観察して、土地の良否を決めるともとれる記事が存在するからで、その一方では『書経』（召誥篇）に「太保、朝<sup>あした</sup>に洛に至りて宅をトす。それ既にトを得れば則ち経営す」という。太保というのは、この『書経』に記される官職で、皇帝の補佐役である。この太保が洛陽に至り、宅室の適地を占った、という。占いによって決められたのである。どのような占いによったのかは不明であるが、これも一種の相宅法である。これからみると、B.C. 五世紀前後の択地法には、占いによるもの、陰陽の気・流水による地相の観察などが存在したということになる。

B.C. 二世紀、『淮南子』には、人間は生まれた土地の地気によって、男女・性格などに違いが出るという。

土地には各々その類をもって生ずることあり。是の故に山気は男多く澤気は女多し。障気は暗多く、風気は聾多し。……（墜形篇）

要するに、この頃には地気と人間との関係がある程度明らかにされている。A.D. 一世紀の『論衡』（詰術篇）には、家相・地相を観る方術が記録されるから、既に紀元前後には地気による家相・地相法がほぼ確立していたと考えることができよう。

漢代の特徴的な思想の中に、いわゆる天人相感説がある。天上界と人間世界が相互に関連するという神秘的思想であって、例えば天文の異常（彗星の出現や日月食など）は、そのまま人間世界の異常（戦乱・地震・旱害・水害など）を示すと考えられた。これには、天と人だけではなく、大地もまた感応する。「天地人」三才の相感である。家相・地相の基本的な考え方は、人と大地に偏るが、そこにあるキーワードは「気」である。気とは、空気・大気と考えてよいが、しかしただの空気ではない。何らかの力、エネルギーをもった目に

見えない存在、これを氣と称した。

古くは、B.C.四世紀『孟子』の中に有名な「浩然の氣を養う」との一句がある。活達な充実した氣力を指すが、これも体力以外に氣力というエネルギーが存在することを前提としている。古代人は、呼吸を止めると苦しくなる、さらに止めているとやがて失神する、それでも止めていると死に至る、という経緯の中で、この大気中には、目に見えないが、生命の維持に重大な関わりのある何かが含まれていると考えた。もちろん酸素などという気体の存在は知らないが、その物質を体内に充実させれば、氣力・体力ともに充実する。B.C.一世紀頃にはそのための呼吸法と体操が組み合わされた導引行氣の術が行われた。いまのエアロビクスである。人体中には、血脈（血管）とは別に氣の巡る経絡がある、というのが、その頃から現代に至る漢方医学の人体観である。

天と地と人体は相い感応する。そうなると、大地の中にも人体と同じように、氣が巡る経路（経絡）があり、人体のツボ（気穴）と同じような氣の溜りがある、という解釈が生まれる。これが風水説の最も基盤的な考え方である。

さて、氣は生命の源泉であるから、大地の中を流れる地氣は、人間の生活に強く作用する。この大地の中の氣の流れを龍脈といい、龍脈上にある氣の溜る場所、人体で言えばツボに当る所、地氣を十分にたたえた所、これを局という。龍脈は中国の西の彼方、伝説上の山である崑崙山から発し、途中二ないし三つの幹線に分かれ、幹線からは無数の支線が根のように伸びて、全土を覆う。風水説で言う最上の地は、より太い龍脈上の土地、あるいは局がそれで、墓地や家屋をここに築くとその一族は末代まで繁栄する。大きな局には都市を築き、特に京城をここに置けばその王朝は繁栄する。この局や龍脈を探すのが風水師の役目であった。

通常、局は北側に山があり、東西にも比較的高い丘がある。さらに南側は広く開けていて、川あるいは湖沼のある地、このような土地が龍脈上の局と考えられた。一般的にいえば、北側に山があり、左右に小高い丘をのぞみ、南に広く開けた地、しかも川や湖をのぞむ地となると、印象としてはかなりの景観となろう。当然、川や湖の水も清浄ということになる。場合によっては、地上にこの局と同じ地形を人工的に作る。そうなると、本物の局と同じように龍脈が形成され地氣が溜る。あるいは逆に、深い穴を掘ったり杭を打ったりして、龍脈を断つことも行われた。実際、『隨州郡図経』という書物には、秦の始皇帝が天下を統一した後、金陵（南京）に天子の氣がたち昇るのを見て、地脈を断つたと記す。金陵から対立する敵軍が現れるのを防ぐためであった。実際にそうしたことがあったか否かは問題ではない。そう信じられていたことが風水説のあり方を示すものである。

また、局に墓を築くと、死者の靈魂は快適な地下生活をおくることができる。これは、「孝」の観念と結びついて作られた説で、A.D.四世紀頃に現われる（郭璞『葬経』）。香港や台湾では、しばしば山の南側、その前方は明るく開けた、住宅地にすると良さそうな土地には必ずといってよいほど墓地があつて、生きている人間よりも死者のための土地が優先されている事実を見ることが出来る。

では、こうした風水説をどのように環境論の中に位置づけることができるのか。いま風水説のキーワード、地氣・龍脈・局という三つのタームを考えてみよう。

1. 地氣は、大地のもつ活力、旺盛な生命活動を維持する地力ということができる。当然、そこには活力のある森林や農地が存在し、ミネラル分や滋養に富む作物が生まれる。

汚染されていない大地ともいえる。

2. 龍脈は地気の流れである。しかし実際には気の流れは実測できない。ただし、大地に活力を与える要素であり、これが枯渇すると生物が育たないとなると、具体的には清浄な水脈、あるいは清浄な大気の流れ、が想定される。
3. 局の地形は、三方を山や岡に囲まれた地。当然その周囲は森林・樹木に囲まれる。龍脈を水脈としてみれば、水の豊かな空気の清らかな地力富む土地。しかも南からは十分な日照がある。

このように風水説をみると、そこには自然界のもつ大きなサイクルが意識されていることが分かる。森林・水源・土壌そして大気と日照。これらのうち、どれか一つでも欠ければ、全体のバランスは大きく崩れる。これは森林生態学の基本である。要するに、陰陽五行説、あるいは気といういささか神秘的な表現をしているものの、風水説上の良地というのは、生態学的にもバランスのとれた健全な大地ということになる。

しかしながら、それだけで風水説は成立しているとも思えない。それは生態学的な条件を充たしてはいるが、それだけで良地・健全な大地とはいえない。確かに健全な大地には、清澄な水があり、緑深い山や森林がある。つまり、優れた景色もまたその条件の一つであろう。ただ、佳景の大地のもつ力は、感動・癒しというような精神上の作用にとどまるといえる。

例えば、現在の風水術というと、多くは部屋の壁の色や、家具の配置など、非常にミニマムな範囲での気の流通などをいう場合が多い。しかし本来的には、大地の中の龍脈や局の存在を知る技術であって、ランドスケープそのものを構成する思想といってもよい。したがって、部屋の中の様子を変えるという発想はない。壁の色を換えてみても、地気の流れが変化するとは思えない。